

『源氏物語』における「人笑へ」--「人わるし」と の比較を中心に

著者	北川 久美子
雑誌名	清心語文
号	2
ページ	1-14
発行年	2000-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000357/

『源氏物語』における「人笑へ」

「人わろし」との比較を中心に

北川 久美子

一 はじめに

『源氏物語』には、対社会的意識を表す言葉の一つとして、「人笑へ」「人笑はれ」という語がある。事実、『源氏物語』には、「人笑へ」四三例、「人笑はれ」一五例、合計五八例の用例が数えられる(注1)。「人笑へ」とは、「世間の物笑いになること」というぐらいの意味である。一方、「人笑はれ」も「人笑へ」とほぼ同じ意味を表す語である。ただし、「人笑はれ」と「人笑へ」とは別の語であり、位相が違うという指摘(注2)もある。しかし、どのように違つかという結論は今のところ出ていない。「人笑はれ」は、笑われる側に力点が置かれた語であり、「人笑へ」は、笑う他者の側に力点が置かれた語であるという違いがあるのではないかと思われるが、いずれにせよ、『源氏物語』では、笑う世間の側の意識よりも、笑われる人物の意識を問題としている。以上のことを前提とした上で、本稿では、次のような理由から、「人笑はれ」も「人笑へ」も一括して「人笑へ」と表現す

ることとする。①「人笑へ」の方が圧倒的に用例数が多い。②「人笑へ」と「人笑はれ」の用例を概観した結果、「人笑へ」の方が、主要人物の人生を左右していく重要な語であると言える(表1参照)。ただし、「明石」巻で源氏の顧慮した「人笑はれ」は重要な意識であるが、女君たちの危惧した「人笑へ」に比べ、その後の人生を通して続く意識ではないと考える。

先に、「人笑へ」が、『源氏物語』における対社会的意識を表す言葉であると述べたのは、先行する作り物語の用例と比べても、『源氏物語』の用例数が圧倒的に多いからである。具体的な用例数を挙げるならば、作り物語では、『うつほ物語』五例、『落窪物語』二例である。参考までに、同時代、もしくはそれ以後のものも挙げるならば、『狭衣物語』三例、『夜の寝覚』一例がみられるが、やはり、『源氏物語』に比べて量的に非常に少ない。以下、参考までに作り物語以外の状況を見てみよう。ただし、『源氏物語』以後の作品は平安時代末までのものとする。まず、歴史物語では、『栄花物語』八例、『大鏡』一例がある。次に、日記では、『源氏物語』に大きな影響を与えた

『かげろふ日記』二例(注3)、同時代の『和泉式部日記』二例が挙げられる。同じく『源氏物語』に近い時代の随筆『枕草子』一例がある。また、和歌には散文よりもさらに用例が少ないが、勅撰和歌集では、『後撰和歌集』二例、私家集では『中務集』一例を挙げることができる。時代は下るが、同じく私家集の『散木奇歌集』一例、『重家集』一例、『壬三集』一例を挙げることができる。以上、『源氏物語』以外の作品における「人笑へ」の用例数を見てきた。それらの作品に共通して言えることは、『源氏物語』に比べて、用例数が極端に少ないことである。もっと言うならば、先に挙げた作品の外には、「人笑へ」の用例を挙げることはできないのである(表2を参照)。量的に圧倒的に多いという点のみを捉えても、また、『紫式部日記』に用例が全くないことを考えても、「人笑へ」は『源氏物語』の構成を考える際の鍵語の一つであると言える。そこで、本稿では、「人笑へ」の類義語中、主として「人わろし」を取り上げ、「人笑へ」の意識と類似した思考がなされている場面に注目することによって、「人笑へ」の意識がいかに重要な構成要素になっているかということに迫りたい。

二 五八例の「人笑へ」

類義語との比較を試みる前に、表1に従って、五八例の「人笑へ」を概観してみよう。『源氏物語』の「人笑へ」の内訳は、「人笑はれ」一五例、「人笑へ」四三例となっている。しかし、この五八例を順次

辿っていくと、その八割以上の用例に、本文の異同が見られるので、五八例を「人笑へ」の用例として特定してよいかという問題が生じてきた。そこで、次のような三段階で整理してみた。

一、本文の異同がないもの。

二、青表紙本系統では本文の異同がなく、別本、河内本系統に本文の異同があるもの。

三、青表紙本系統について、伝本間での本文の異同が、一本のみ見られるもの。

その結果は次の通りである(表3を参照)。

一、「人笑へ」七例、「人笑はれ」二例、合計九例。

二、「人笑へ」二七例、「人笑はれ」一二例(仮名のみ)の本文の異同も含む、合計三九例。

三、「人笑へ」八例、「人笑はれ」一例、合計九例。

本文の異同がある二と三の用例についても、重大な相違ではないと判断すると、一、二、三の用例を合わせて、五七例は「人笑へ」「人笑はれ」と特定することができると思われる。残りの一例は、表1「人笑へ」15「若菜上」巻の用例で、青表紙本系統のいくつかの伝本間においてのみ、本文の異同が見られた。御物本「人わらはへ」肖柏本「人わらはれ」とあるが、「人わろし」などといった別の語ではなく、また大方のテキストは「人笑へ」としていることもあり、これも明治書院本テキストに従い、「人笑へ」と考えたい。以上のことから、「人笑はれ」一五例、「人笑へ」四三例と特定したい。

次に、五八例の「人笑へ」を用例数の上から考察してみよう。「人笑へ」の巻別用例数は次の通りである。

〈正篇〉紅葉賀(1)・葵(1)・賢木(1)・須磨(1)・明石
(2)・松風(1)・薄雲(1)・朝顔(1)・胡蝶(1)・常夏
(1)・藤袴(1)・真木柱(6)・梅枝(2)・藤裏葉(1)・若
菜上(1)・若菜下(2)・柏木(3)・横笛(1)・夕霧(1)
計(29)

〈続篇〉紅梅(1)・竹河(3)・総角(10)・早蕨(2)・宿
木(3)・東屋(5)・浮舟(4)・蜻蛉(1) 計(29)

「人笑へ」という語が見られる巻は、全体で二七巻に上り、五十四帖のちょうど半数を占めている。巻別の用例数の上からも、「人笑へ」の意識が、『源氏物語』の中で、相当頻繁に描き込まれていることが窺われよう。なお、物語の叙述量では、続篇は正篇のほぼ二分の一であることを考慮すると、正篇、続篇の用例数が同数であるということは、「人笑へ」の意識は、続篇、殊に宇治十帖においてより多く見られるものだと言っているのではない。続篇のうち、宇治十帖では二五例を数えることができ、全体の四三パーセントを占めている。玉鬘十帖の九例と比べても圧倒的に多い。

「人笑へ」を意識する人物は、二六人で、その内訳は男性一〇人、女性一六人である。正篇と続篇での男女比を見てみると、正篇では、男性八人、女性七人とはほぼ同数である。それに對し、続篇では、男性三人、女性八人と圧倒的に女性が多く、「人笑へ」は、どちらかと

言えば、女性に強く意識される傾向があると言えるかもしれない(用例数の中で、夕霧・玉鬘については、正篇、続篇ともに登場しているので、二度数えている)。

人物別では、「人笑へ」の用例数の最も多い人物は、大君と中君で、ともに、六例を数えることができる。中でも、大君は「人笑へ」になることを忌避して、結婚拒否を貫き、やがて、死に至る。しかも、大君の「人笑へ」の意識は、「総角」巻のみに見られ、そのことも、『源氏物語』の構成上、重大な問題を投げかけていると思われる。また、妹の中君は、匂宮との身分違いの結婚によって「人笑へ」になることを憂慮している。さらに、異母妹の浮舟自身が意識する「人笑へ」も四例数えることができる。浮舟は、二人の高貴な男性の間で愛の板挟みとなり、「人笑へ」になることを恐れるあまり、入水自殺に至る。なお、浮舟の母や乳母の、浮舟が「人笑へ」になることを恐れる用例も合わせると、浮舟関連として九例数えることができる。

結局、宇治の女君たちに関する「人笑へ」の用例は、二〇例に上り、五八例全体の三分の一に当たる。同時に、宇治十帖での二五例のうち的大部分を占めていることにもなるのである。同一人物について用例数が宇治十帖において極端に増加しているという点を捉えても、この十帖における女君たちの「人笑へ」の意識が、物語の構成上重大な意味を持っていると思われる。

一方、用例数が極めて少ないにも関わらず、非常に重大な場面で「人笑へ」を意識する人物も見逃せない。紫上である(表1「人笑へ」

15)。女三宮降嫁という事態に至って紫上は初めて「人笑へ」を意識する。「若菜上」巻(三五頁)において一例のみ、紫上が意識する「人笑へ」の用例を挙げることができる。このことも『源氏物語』の構成上の大きな問題である。

以上見てきたように、正篇に比べて、続篇に用例数が集中していくことから、正篇の「人笑へ」と続篇の「人笑へ」とは、様相を異にしている。正篇では「人笑へ」は、男性、女性ともに強く意識される語であったが、続篇では、どちらかと言うと、女性に強く意識される語となっている。いわば「女の内面思考の言語」(注4)と言ってもよいだろう。しかも、女君に限って言えば、正篇の女君たちが、各々一、二の限られた場面においてのみ「人笑へ」を意識するのに対し、続篇の宇治の女君たちの場合は、各々、七例、九例というように繰り返し意識されるという特色がある。さらに言うならば、この点に、『源氏物語』の主要人物に「人笑へ」の意識を持たせることによって、プロットを構成していくとする作者の意図までも窺うことができるだろう。

三 「人笑へ」と「人わろし」

「人笑へ」は、恥の意識に関係した語であり、同時に、世評を強く意識する語である。さらに言うならば、劣位の人間が、優位の人間から笑われることを恐れる意識である(注5)。そういう側面からみて

も、類義語は、いくつも考えられよう。「はしたなし」「かたはらいなし」「はばかり」「しのぶ」等、体面に関わる語は多い。本稿では、多くの類義語の中から、「人わろし」に着目し、同じ文脈の中で、あるいは、同様な状況の中で、それらの語が使用されている例などを取り上げながら、比較検討していきたい。

「人笑へ」は、人が笑うという関係で成り立ち、「人笑はれ」は、人に笑われるという関係で成り立った語であろうという予想はつく。実際、『源氏物語』には、「人笑へ」というように一語ではないが、「人に笑はせたまふな」(「浮舟」巻、一二三頁)や「人笑ふらん」(「夕霧」巻、三〇九頁)などのように、「人笑へ」とほぼ同義に解することができるセンテンスが二例見られる。同様の例は、『落窪物語』(注6)などにも見られる。「人が笑う」というような関係で成り立つと思われる語に「人わろし」「人わるし」がある。『源氏物語』の使用われ方からすると、「人わろし」とは、「体裁が悪い」というぐらいの意味である。「人わろし」も「人わるし」もほぼ同じ意味を表す語であるので、本稿では一括して「人わろし」と表現することとする。

『源氏物語』中、「人わろし」は全部で五〇例数えることができる。「人わろし」三七例、「人わるし」一三例。「人わろし」の巻別の用例数は次の通りである。

〔正篇〕桐壺(1)・帚木(1)・空蟬(2)・末摘花(2)・花宴(1)・葵(1)・賢木(4)・須磨(2)・明石(2)・蓬生(4)・松風(1)・絵合(1)・朝顔(1)・少女(2)・常夏

(1)・行幸(2)・真木柱(2)・梅枝(1)・藤裏葉(3)・若菜下(1)・柏木(2)・夕霧(3)・幻(1)・計(41)

〔続篇〕紅梅(1)・橋姫(1)・椎本(1)・総角(2)・宿木(2)・東屋(1)・浮舟(1)・計(9)

正篇の叙述量が、続篇のおよそ二倍であるにもかかわらず、「人笑へ」は、正篇、続篇とも二九例で同数だったことから、続篇に多く現れる語であると言えた。それに比べると、「人わろし」は、正篇に多く見られる語であると言えよう。しかも、五〇例中二四例は、源氏に關してのものであり、それは全体のほぼ二分の一に當る。そのうち、一六例は源氏が自分自身のことを「人わろし」と意識しているものである。正篇において、源氏が「人笑へ」を意識する用例を三例数えることができたが、それに比べても、圧倒的な多さである。「人わろし」の場合、源氏以外の登場人物に關する例は少なく、大方は、一、二例で、多くても三例を数えるのみである。以上のことから、「人わろし」は、源氏に特に強く意識されている語だと言えるだろう。

源氏に關する用例をさらに細かく分類してみると、次のように大別することができる。

ア、自分自身のことに関して、「人わろし」と意識している用例。

イ、源氏の側から、他の人物のことや、その人物の置かれている状況に対して、「人わろし」を意識している用例。

アに關して、「人わろし」と「人笑へ」の意識を比較してみよう。

①「いかにせまし、かかりとて都に帰らんことも、まだ世に赦され

もなくては、人笑はれることこそまさらめ。(略)浪風に騒がれてなど人の言ひ伝へんこと、後の世までいと軽々しき名をや流しはてん」とおぼし乱る。(「明石」巻、一五六頁)

②「世の人の聞き伝へん後のそしりもやすからざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれる目を見む。(略)退きて咎なしとこそ、昔のさかしき人も言ひおきけれ、今日かく命をきはめ、世にまたなき目の限りを見尽くしつ。さらに後のあとの名をはぶくとも、たけき事もあらじ。(略)」とおぼして(「明石」巻、一六三頁)

③忍びてや迎へたてまつりてましと、おぼし弱るをりをりあれど、さりとにかくてやは年を重ねん、いまさらに入わろきことをばとおぼししづめたり。(「明石」巻、一七六頁)

④「情なうおし立たむも、事のさまに違へり。心くらべに負けんこそ人わろけれ」(「明石」巻、一八〇頁)

①④までは、いずれも源氏の心内語の中にある「人笑へ」と「人わろし」である。①では、須磨の地で暴風雨や雷鳴が止まず、都に逃げ帰ろうとするならば、勅勘を蒙っている身なので、今以上に世間の物笑いとなり、深い山に入ったとしても後の世まで不名誉な評判を流すだろうと悩む源氏の姿が浮き彫りにされている。

②においても、源氏が明石入道の迎えに従ったという世間の非難を氣遣いしつつも、神意に背くならば、それ以上に世間の物笑いになると判断し、明石行を決意する源氏の姿が描かれている。

①、②ともに「軽々しき名」「あとの名」という体面に関わる語が続く、現況からの転出をはかっても、このままの状態を続けても、一層「人笑へ」となり、それは、大変不名誉なことであるということが関係づけられている。このように、源氏は、「人笑へ」を意識する時に自分の名を汚すことを思いやっているのである。

それに対し、③は、明石に移ってから、ますます紫上のことが思われるが、紫上を明石の地に迎えるような外聞の悪いことはするまいと思いつけている場面である。④も、今までの女性に対する場合とは異なっており、明石御方の打ち解けなくなさそうな気持ちを察し、根比べに負けてしまったら、格好が悪いと、思い悩む場面である。そのような不体裁な結果は、自分としても許せないことである。

右の例からも「人笑へ」に比べ、「人わろし」は、自分自身が、不体裁を強く意識している。また、「人笑へ」のように、自分の名を汚すことまでも思いやっではない。これらのことから、「人わろし」の方が恥の意識が軽く、「人笑へ」になることの方が登場人物にとって致命的な恥辱であると言える。

さらに、イの「人わろし」を検証してみると、対社会を考えた場合、「人笑へ」ほど悩みが重くないことが、より一層わかってくる。

- ⑤御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々食ふ。(「末摘花」巻、二〇八頁)
- ⑥さまざまに人わろき事どもを愁へあへるを、聞きたまふもかたはらいなければ、たちのきて、ただ今おはするやうにてうち叩きた

まふ。(「末摘花」巻、二〇八頁―二〇九頁)

右の⑤、⑥は、常陸宮邸の「格子のはさま」から源氏が見た、零落した宮家の様子を述べた地の文である。宮邸の食器や、女房の泣き言を、源氏は体面を重んじる宮家であるゆえに、「人わろし」と見ている。この場合の「人」とは、源氏を指しており、源氏が他者となっており、「人わろし」と感じているのである。この場合も、「人わろし」は、「人笑へ」のように、自分自身もしくは我子に対する他者の目を著しく気にするといった重い語ではない。この常陸宮邸を見る時の源氏の「人わろし」は、後日譚である「蓬生」巻では、末摘花の叔母である大式の北方の目から見た「人わろし」へと転じていくのである(注7)。

さらに、「人笑へ」と「人わろし」の相違を検証するために、二語の並置されている用例に触れてみることにする。

⑦「今は、しかいまめかしき人を渡してもてかしづかん片隅に、人わろくて添ひものしたまはむも、人間きやさしかるべし。おのがあらむこなたは、いと人わらへなるさまに従ひなびかでもものしたまひなん」とのたまひて、(「真木柱」巻、二五二頁)

⑧「身を分けてなど(略)かばかりの世の中を思ひ棄てむの心に、みづからもかなはざりけり」と、人わろく思ひ知るるを、ましておしなべたるすき者のまねに、同じあたりかへすがへす漕ぎめぐらむ、いと人わらへなる棚無し小舟めきたるべしなど、(「総角」巻、一八一頁)

右の⑦、⑧で、並置されていることから、二語の相違は明らかであ

る。⑦は、式部卿宮が、鬚黒の北方に語った会話文である。体面を重んじる宮は、自分の娘である北方が、片隅に追いやられる状況を「人わろし」で、「人笑へ」な状態と考え、自邸に引き取ろうとする。玉上琢弥の『源氏物語評釈』（注8）では、どちらも「見苦しい」と解しており、ほぼ同義と捉えている。しかし、明らかにこの二語の間には差異がある。この場合、「人わろし」の「人」とは、鬚黒邸の人々と捉えてよいであろう。それに対し、「人笑へ」の「人」とは、世間の人々と捉えてよいであろう。そのように考えると、「人わろし」に比べ「人笑へ」は、より広範囲での恥の意識と捉えることができるであろう。⑧についても、同様のことが言えるだろう。これは、中君と大君の間で思い悩み、大君への思いを募らせる薫の心内語の後の地の文である。この場合、「人わろし」の「人」とは、大君や中君、さらに弁尼と捉えてよいだろう。「人笑へ」の方は、この場合も、もちろん、世間の人々を指していると思われる。このように、二語が並置されている用例からも明らかのように、「人笑へ」の「人」は、より広範囲の他者を指していると言えるだろう。

次に、「人わろし」の別の面を考えてみよう。先に、「人笑へ」が、女性に強く意識される語ではないかと述べたが、「人わろし」は、源氏を代表とする高貴な男性が体面を気にする語だと言えるだろう。その点について、源氏や式部卿宮に関する用例に関してはすでに触れている。

一方、「人わろし」五〇例中、女性が意識する例は、わずかに、七

例のみ挙げることができる。その中で、六条御息所の「人わろし」「人笑へ」を取り上げ比較してみよう。

⑨心やましきをばざるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すすろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく悔しう、何に來つらんと思ふにかひなし。（「葵」巻、一二頁）

⑩つらき方に思ひはてたまへど、いまはとてふり離れ下りたまひなむは、いと心ぼそかりぬべく、世の人聞きも人わらへにならんこととおぼす。（「葵」巻、一七頁）

⑨は御祿の日の車争いの場面である。衆目の集まる中で、葵上方の供人に、この上なく体面を傷つけられた六条御息所が、胸中に抱いた「人わろし」である。この悔しい思いは、⑩の伊勢下向の決意を迫られる御息所の「人笑へ」に呼応している。世間の噂にも、物笑いになるはずの伊勢下向であるが、都に止まれば、「みな思ひくたす」有様なもの堪えがたく、御息所は思い悩む。

⑨の「人わろし」は、御息所の心内語中のもので、「またなう」とあるだけに、自分と知ってこの上なく侮蔑された状態は、「人笑へ」と同様に恥ずかしく、外間の悪いことだと思われる。ところが、⑨で「人わろし」と言った時は、葵上二行とその周辺の物見車の間という小範囲の「人わろし」であり、その場限りのものである。しかし、その事は、やがて、人の噂になっていく。源氏も物見車の前を通る時は気づかなかったが、その後、その出来事は、源氏の耳にも入って

る。いわば、世間の噂になった時、かつて「人わろし」と意識されたものは、「人笑へ」に転化しているのである。そのことと同時に、⑩の「人笑へ」は、御息所が伊勢下向を決意するという物語のプロットを左右するものでもあると言えるだろう。

以上、「人わろし」の具体例に即しながら、「人笑へ」との比較を試みた結果、明らかにになったことは、次の通りである。

①「人笑へ」は続篇に多く現れる語であるのに対し、「人わろし」は正篇に多く現れる語である。

②「人笑へ」が女性に強く意識される語（続篇の女君たちの内面思惟の言葉^{（注4）}）であるのに対し、「人わろし」は、男性が体面を気にする語である。

③「人わろし」は、源氏に関する用例が全体の半数を占めることから、源氏に特に強く意識されている語であると言える。

④「人笑へ」は「軽々しき名」「あとの名」など体面に関わる語に続き、「人笑へ」になることは、世間で不名誉な評判が立つということと密接に関係している。「人わろし」には、名を汚すという意識はなく、「名」という語も併用されない。それだけ「人笑へ」の方が「人わろし」より重い意識を表す語である。

⑤「人笑へ」の「人」は「世間の人々全体」を指し、「人わろし」の「人」に比べ、より広範囲の「他者」を指している。

⑥「人わろし」は、それ自体、他人に対して体裁が悪いという意味の語であるので、「人笑へ」のように、「人聞き」「世の聞え」

などの世評を表す語とは併用されていない。

四 おわりに

登場人物たちが、「人笑へ」な状態になることを忌避しようとするのは、世間から嘲笑され、名折れとなることを、存在が根底から揺るがされるほどの屈辱だと考えているからである。「人わろし」と感じる場合には、そこまでの突き詰めた思いはない。それは、対社会意識に差があるからだけではなく、批判される程度においても強弱の差があるからである。「人笑へ」を意識する時「名」を慮り、「人わろし」と感じる時にはこれがないというのも、そのことと無関係ではないであろう。

嘲笑には、いうまでもなく、批判・非難の感情が含まれている。非難の意を重視すれば、「そしり」や「もどき」も、「人笑へ」の類義語であると言えるかもしれない。「もどき」という語は、「もどく」という動詞も合わせると、『源氏物語』中に三四例あるが、そのうち二一例は「世のもどき・人のもどき・よそのもどきを負ふ」という形になっている。世間の人の非難を受けるということにおいて、これは「人笑へ」になることと同じであるように思われる。実際、「朝顔」巻の一例などは、文脈上からも、「人笑へ」と同義であると考えられる。しかし、「そしり」や「もどき」自体には、「人笑へ」という語が有するような侮蔑のニュアンスは入っていない。

なお、「人わろし」と同義だと考えられる語として、「をこがまし」がある。しかも、「をこがまし」四四例のうち、「人笑へ」とほぼ同義かと考えられる用例が、「賢木」巻と「行幸」巻に各一例、「人笑へ」の場合に類する状況で使われている用例が、「早蕨」巻に一例、「人笑へ」な状態を「をこがまし」と思っている用例が、「真木柱」巻と「総角」巻に各一例ある。だが、「そしり」「もどき」「をこがまし」は、「人わろし」と同様、登場人物がそれを意識したとしても、「人笑へ」を意識した時のようには強い衝撃を受けず、そのことによって、新たな行動を起こしたり、逆に行動を抑制したりするようなこともない。

以上、文脈によっては「人笑へ」と同義と解される場合、或いは、「人笑へ」と同じ状況を表す場合の類義語と「人笑へ」とを比較検討した結果、「人笑へ」の方が非常に重い意識を表す語であることが明らかになった。つまり、「人わろし」などの類義語の表す意識のより深化した恥の意識が、「人笑へ」の意識であった。狭い貴族社会において、「人笑へ」になることは、確かに致命的な恥辱であろう。しかも、「人笑へ」は「人聞き」や「あとの名」などの体面を表す語と関連して使われ、主要人物の運命を左右するような重要な場面で意識され、その人物の行動を決する要因となっている。それ故に、「人笑へ」の意識が構成上において果たしている役割は、大きいのだと言ってよいであろう。

『源氏物語』の本文の引用は、阿部秋生著校注古典叢書『源氏物

語』全六巻（平成十年二月、明治書院）に拠った。

注1 本稿の「人笑へ」「人笑はれ」の用例は、池田亀鑑編著『源氏物語大成』（中央公論社）に拠った。なお、「人笑へ」「人笑はれ」の用例数は使用するテキストによって多少の差異がある。

2 山本利達『人笑へ』と『人笑はれ』（『むらさき』第三二輯、平成七年十二月）

3 『かげろふ日記』の用例としては、日本古典文学大系（岩波書店）のみ三例を数えることができる。

4 大森純子「源氏物語『人笑へ』考」（『名古屋大学国語国文学』、平成三年十二月）

5 三浦佑之「古代文学にみる笑い『あむ』と『わらふ』をめぐって」（『日本の美学』20、ベリカン社、一九九三年十一月）

6 松尾聡・寺本直彦校注『落窪物語・堤中納言物語』（日本古典文学大系、昭和四十三年六月、岩波書店）の巻二、二二八頁に「人笑ふとて」とある。

7 「蓬生」巻三七頁四行目「人わろき」、九行目「人わろげ」を指す。

8 玉上琢弥『源氏物語評釈』第六巻（昭和四十一年六月、角川書店）二二頁

（きたがわ くみこ／平成十一年度博士前期課程修了）

表1
人笑へ

番号	巻	頁	意識する人物	誰にどんなことを笑われるか	備考
1	葵	二	六条の御息所	源氏につれなくなされたり、車争いで世間の人々に侮辱されたこと	心内語
2	賢木	六	藤壺	源氏との浮き子が漏れて世間の人々のもの笑いになること	心内語
3	須磨	二	朧月夜の尚待	源氏との仲が露見してしまったので世間のもの笑いになっていること	地の文
4	松風	二〇	明石御方	上京しても源氏との対面はままだと思うので待つ身となつて世間のもの笑いになりきまり悪いこと	心内語
5	薄雲	三	明石御方	姫君が紫の上のもとに移つたとしても母の身分の低さや田舎育ちのことで世間のもの笑いになること	会話文
6	朝顔	一六	源氏	このまま朝顔を得ずこの恋が空しくなるなら世間のもの笑いになること	心内語
7	藤袴	三〇	玉鬘	宮仕えに際して玉鬘を憎んでいる人々が源氏との仲を噂しもの笑いの女性としていいふうさだろうこと	地の文
8	真木	二六	兵衛督	兄は妹の夫に玉鬘をとられ妹の北の方は夫をとられたとして世間のもの笑いの種にされていること	地の文
9	真木	二五	式部卿の宮	玉鬘を迎えた邸に娘である北の方を置いておくのも世間のもの笑いの種にされること	会話文
10	真木	二五	髭黒大將	北の方が玉鬘を憎み実家に帰るということは世間のもの笑いの種になつて軽率だとそしられること	会話文
11	真木	二五	髭黒の北の方	世の人並みでない物の怪のとりつく病身と父宮にも心配をかけ玉鬘のことで世間のもの笑いになっていること	会話文
12	真木	二六	式部卿の宮	髭黒の仕打ちに対して辛抱することは不面目で世間のもの笑いになること	会話文
13	真木	二六	髭黒の北の方	無理に踏みとどまっていって捨てられてしまつてはいよいよ世間のもの笑いになること	心内語
14	梅枝	三二	内大臣	夕霧と雪岳雁との縁談に弱氣になつて源氏の言いなりになつてもかえつて世間のもの笑いの種になること	会話文
15	菫土	三	紫の上	女三の宮の降嫁のことで思い悩みこれまで源氏の愛を信じていい気	地の文

21	20	19	18	17	16
竹河	紅梅	柏木	柏木	若菜 下	若菜 下
五	四	三〇	三三	二三	二三
玉鬘	貞木柱	一条御息所	朱雀院	堂兵部卿宮	式部卿の宮
<p> になつていたと世間のもの笑いになるのではないかと内心恐れること 娘が物笑いにされた不幸をかみしめ孫だけは世間の物笑いにしたくないと思つたこと 兵部卿宮が熱心に所望したことはみなあてがはずれて独身でいたので世間の物笑いになつていと思つてゐること 女三の宮に対する源氏の情愛が薄いことから世間の物笑いになるような夫婦関係をもつて 落葉の宮が柏木に降嫁しそのうえ若くして木一人になつた薄幸を思つて世間の物笑いになることを残念に思つて 娘の宮御方が自分の亡きあと無理に結婚すると不幸になり世間の物笑いになるので出家をする方がよいと思ふこと 後見のない大君の内は不安だし世間の物笑いになるかもしれずはばかりれること </p>					
		地の文	心内語	地の文	心内語
29	28	27	26	25	24
総角	総角	総角	総角	総角	総角
三〇	二四	二五	二六	二八	二七
大君	大君・中の君	中の宮	薫	薫	大君
<p> 中の君を入内させたら大君と同様の仕打ちをうけ世間の物笑いになるので尚侍にしようと思ふこと 父宮の遺戒に世間の物笑いになるような結婚をするなどあり、中の君だけは世間並みの結婚をさせたいと思ふこと 親の意志で結婚を決めるなら世間の人に笑われることもないが自分の意志で結婚を決めることは物笑いになること 大君に嫌われながらもあきらめられないでつきまとうのは世の物笑いであること 大君からは拒まれ中の君は匂宮のものとなつてどつちつかずで世間の物笑いになること 匂宮との縁で世間の物笑いの種となつたら見苦しい結果になること 匂宮の心中を知らない女のほうでは結婚に関して世間の物笑いになるのではないかと心を痛めてゐること 匂宮のやり方を恨み薫の心もわか </p>					
心内語	地の文	心内語	会話文	心内語	心内語

36	35	34	33	32	31	30
宿木	宿木	宿木	早蕨	総角	総角	総角
二四	二七	二七	二六	二五	二三	二三
夕霧	中の君	中の君	夕霧	女房	大君	大君
<p>らない状態をみて周りの女房たちが笑うような馬鹿げたこと 姉妹とも不幸な運の持ち主で結婚しても夫に先立たれるだろうと世間の物笑いの種を増すこと 匂宮が通ってこなくなつて中の君が世間の物笑いにされて情けないこと 大君の死は匂宮のなされ方を見て世間の物笑いになることを悲しく思ったため 六の君の裳着を日延べするのは世間の物笑いになること 匂宮と六の君との婚儀を知って身の程を思い世間の物笑いになるだろうと思つたこと 山里に帰ろうと思うにつけ山里人に笑われるだろうと軽率さを悔やむ 匂宮と六の君との婚儀に匂宮が来ないのでは夕霧父娘は世間の物笑いの種になること</p>						
地の文	地の文	心内語	地の文	会話文	心内語	心内語
37	38	39	40	41	42	43
東屋	東屋	東屋	浮舟	浮舟	浮舟	浮舟
二〇	二〇	二〇	二二	二五	二六	二四
中将の君（浮舟母）	中将の君	中将の君	浮舟	浮舟	浮舟	浮舟
<p>浮舟と少将との婚儀について仲人に「少将の心変わりがあれば世間の物笑いになって悲しい」と語る 八宮との縁で傷ついた経験から浮舟が世間の物笑いにならないように考え薫との縁を拒絶する 中の君に浮舟を預けたがそこでも屈辱を受け、そのまま居れば世間の笑ひ者になると三条の小家に移す 匂宮との秘密が露見して世間の物笑いになつたと苦悩 生きながらえて世間の物笑いになる事件が起こつたらと死を決意 世間の物笑いになって生き恥をさらすより死んでしまつた方がよいと思う 匂宮との関係で軽薄な女として世間の物笑いになりさらに薫にも知られて立つ顔のない身になるより、自殺して非難を受ける方がましだと思う</p>						
会話文	会話文	会話文	心内語	心内語	心内語	心内語

人笑はれ

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
藤裏 葉	梅枝	常夏	胡蝶	明石	明石	紅葉 賀
三四	二六	二六	二五	二五	二六	二三
内大臣	内大臣	内大臣	玉鬘	源氏	源氏	藤壺
<p>御産で自分が死んだと聞いたら弘徽殿方の人々から物笑いになるだらう。生きたい</p> <p>都に帰ることも世に赦されていなくて世間の物笑いになり後の世まで不名誉を流すだらうという悩み</p> <p>明石入道に従って明石に移ったと非難される以上に神意にそむく方が世間の物笑いになること</p> <p>親が娘に懸想している様な事情が世に漏れたら世間の物笑いになって評判になる</p> <p>雲居雁の入内は難しくなったが世間の笑ひ者にはさせたくないという思い</p> <p>雲居雁の結婚について弱気になってこちらから申し出るのも世間の物笑いになるので夕霧が熱心なときに結婚させるべきだったと後悔する</p> <p>夕霧と雲居雁との結婚も難航して別の相手を考えるのは外間が悪くなんとか世間体をつくらってこちらから折れようと決心</p>						
心内語	心内語	会話文	心内語	心内語	心内語	心内語
⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑧
蜻蛉	東屋	東屋	早蕨	竹河	夕霧	柏木
二六	二五	二六	二九	二五	二五	二五
右近(浮舟の女房)	浮舟の乳母	中の君	中の君	蔵人少将(夕霧の子)	致仕の大臣	夕霧
<p>落葉宮が未亡人になったことで世間の物笑いになることを悩んでいる様子を見ていたわしく思っている</p> <p>皇女が臣下に降嫁し不幸にも未亡人になったので世の物笑いとなっていることを悲しんで</p> <p>夕霧と落葉宮とのことで雲居雁が実家に帰ったことで世間の物笑いになったように心痛する</p> <p>大君への恋慕で恋敵の薫と比べ自分が世間の物笑いになっているのではないかと悩む</p> <p>故郷宇治を離れがたく匂宮の邸に移ることで日陰者と世間の物笑いの種になるのではないかと悩む</p> <p>大君が生きていたとしても我が身同様日陰者だと姉妹そろって世間から物笑いになるだらうという思い</p> <p>浮舟を見下したような少将の仕打ちや匂宮の振る舞いを見て浮舟が世人にばかにされたままではいけないという思い</p> <p>薫との縁がかえって不幸を招くことは世の物笑いいで母親の願望や期待を裏切ることにもなりそれで苦しみ死を選んだ</p>						
会話文 中の心内語	会話文	会話文	地の文	心内語	地の文	心内語

表2

『源氏物語』以外の作品の「人笑へ」の用例数（先行文学と、それ以後の作品。以後の作品については、平安末までとする。）
 ※『とりかへばや物語』と『大鏡』の用例については、研究者によって用例数が違うが、テキストによって、用例数に違いが生じているものと思われる。

ジャンル	作 り 物 語	歌 物 語	歴 史 物 語	説 話	日 記
1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2	1 2	1 2 3 4
作品名（テキスト）※索引を利用したもの	※竹取物語 ※うつは物語（古典大系、岩波書店） ※落窪物語（古典大系、岩波書店） ※夜の寝覚（古典大系、岩波書店） ※狭衣物語（古典大系、岩波書店） ※浜松中納言物語 ※堤中納言物語 とりかへばや物語（新古典大系、岩波書店）	※伊勢物語 ※大和物語 ※多武峰少将物語 ※平中物語	栄花物語（新編古典文学全集、小学館） 大鏡（新編古典文学全集、小学館）	※日本書異記 ※今昔物語集	※かげろふの日記（古典大系、岩波書店） ※土佐日記 ※和泉式部日記（古典大系、岩波書店） ※紫式部日記
用例数	0 1 2 3 1 0 0 0 0	0 0 0 0 0	1 8	0 0	0 2 0 2

表3

本文の異同（人笑へ・人笑はれの番号は、表1による。）

1、本文の異同がないもの 九例

人笑へ 7、9、10、12、13、24、26、七例

人笑はれ ②、③、二例

2、青表紙本系統では本文の異同がなく、別本、河内本系統に本文の異同があるもの 三九例

人笑へ 1、2、3、4、5、11、16、17、20、22、

23、27、28、29、30、31、32、34、

35、36、37、38、41、43、二四例

（仮名遣いの異同） 14、19、40、三例（二七例）

人笑はれ ④、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、九例

（仮名遣いの異同） ①、⑥、⑭、三例（一一例）

3、青表紙本系統について、伝本間での本文の異同が、一本のみ見られるもの 九例

人笑へ 6、8、18、21、25、33、39、42、八例

人笑はれ ⑤、一例

4、その他 一例

人笑へ 15、御物本「人わらはへ」、肖柏本「人笑はれ」

日記	随筆	和歌 勅撰集	私家集
6 5	1	1 2	3 4 5
※更級日記 讃岐典侍日記（古典文学全集、小学館）	※枕草子（古典大系、岩波書店）	※万葉集（国歌大観） ※後撰和歌集（国歌大観） （勅撰集では後撰和歌集のみ） ※中務集（国歌大観） ※散木奇歌集（国歌大観） ※重家集（国歌大観）	
0 0	1	2 0	1 1 1